

環太平洋大学学長、中央教育審議会教育課程部会委員

梶田 叡一

文部科学省初等中等教育局教育課程課国際教育課教科調査官、  
国立教育政策研究所教育課程研究センター教育課程調査官

直山 木綿子

# 小学校の外国語活動が これからの教育を変える

今春から小学校で外国語活動が必修になりました。

この外国語活動をどうとらえて新しい教育に生かすとよいか、

梶田 叡一先生と直山 木綿子先生に語っていただきました。



梶田 叡一

かじた えいいち\*松江市生まれ、米子市で育つ。京都大学文学部哲学科卒業。国立教育研究所主任研究官、大阪大学教授、京都大学教授、京都ノートルダム女子大学学長、兵庫教育大学学長などを経て、2010年4月より現職。日本語検定委員会理事、聖ウルスラ学院理事長、松徳学院理事長などを兼任。文学博士。2001年からの中央教育審議会に参画、副会長、初等中等教育分科会長、教育課程部会長などを歴任。

直山木綿子

なやま ゆうこ\*京都府生まれ。英語科教諭として京都市立中学校で勤務の後、1998年京都市総合教育センター研究課にて研究員、2003年教育センターカリキュラム開発支援センター指導主事、2006年教育センター指導室指導主任、2007年京都市教育委員会学校指導課・教育センター指導室小中連携英語教育担当指導主事などを経て2009年4月より現職。著書に「ゼロから創る小学校英語」(文溪堂)、編著に「小学校新学習指導要領の授業 外国語活動 実践事例集 I-II」(小学館)など多数。

## \* 小学校外国語活動 負担感・不安感の払拭\*

**梶田** いよいよ小学校で新しい学習指導要領が全面实施になりました。「確かな学力」を土台とした「生きる力」の育成を目指しています。内容的には、三つの大きな柱があります。

一つ目は理数系の学力をつけること。二つ目は伝統文化を受け継いでもらうこと。三つ目は外国語の導入です。

日本の小学校教育で初めて外国語が入ってきます。その総責任者の直山先生にお話をいただきます。まず、そのイメージなり、決意なりをお願いします。

**直山** わたしは中学校の英語の教師の経験があるので、あまり英語に抵抗がありません。しかし、小学校の先生方にはものすごく抵抗があるようです。

まずは、新しいものが入ってきたということに対する負担感。それと、先生方ご自身が小学校のときに外国語活動の経験をしておられないから、授業の内容が具体的にどんなものかイメージでき

ない。この不安感です。この負担感と不安感をなんとか払拭するために、次の二つのことが必要だと思っています。

一つは、ハード面での条件整備です。例えば、英語ノートをつくりたり、あるいは研修をしたりすることです。でも、それだけではうまくいかない。もう一つは、やはりソフト面、気持ちの面で「大丈夫やで、一緒にがんばらな」という励まし、包み込むような一緒にやっつこうという仲間意識が大事です。わたしはいま、この両面を一緒に進めていかなければと思っています。

いま、ハード面は、いろいろな方のご意見を聞いて計画を立て予算をつけて、着々と準備を進めています。ソフト面は、直接、先生方とお会いして、一緒に同じ場と時間を過ごして広げていくしかないと思っています。

## \* 「一緒にがんばらな」と ちゃんと背中を押すこと\*

**梶田** わたしは、ずっと教員養成

にかかわってきましたが、小学校教師の免許を取るために、大学に入ってからピアノをやる学生がいます。最初は不安がいつぱいで、始める前はだれでも「できるかな」「こんなものなればいいのに」と思うけれど、やっついでいくと「意外に大したことないね」となるものです。英語も同じだと思います。

ですから、5、6年生の担任になった先生は、思い切つて自分なりにやってみたらよいと思えます。実践報告もいろいろ出ていますから、見よう見まねでやってみれば、そんなに怖くはないでしょう。

**直山** いつも先生方は子どもたちに「やっつこらん、大丈夫よ」と言っておられますが、ご自身のことになると一歩引かれます(笑)。

その背中をちゃんと押してあげることがとても大事。きつく押しすぎたらあかんし、あまりやさしすぎてもあかん。そのさじ加減が大事です。

**梶田** 校長先生には、英語が得意でない先生もいらつしやいます。管理職はオールマイティーで

ある必要はありません。ただ、背中を押してあげることです。「わたしは英語を教える経験をしなかつたけれど、あなたには貴重な機会ですね。ここで新しい経験をして、子どもたちが片言でいいから英語で活動できるようにならたらおもしろいでしょう」とね。

**直山** 校長先生が新しく入ってきた外国語活動を「やっかいなものやなあ」と思われるか、「よし、新しいもので学校づくりをしてやろう」と思われるかで、大きく変わってきます。これは外国語活動に限らなくて、どんなことでも思いのある校長先生であれば、学校がうまくまわります。

**梶田** そのとおりですね。

**直山** 先生方は、負担感と不安感から外国語活動を新しいものとして特別扱いされます。

先生方が算数や国語や音楽や図画・工作でやっている手法を外国語活動にもち込んだら何も怖くない。学級経営ができていたら恐れるに足りません。

とはないと思います。英語はアメリカやイギリスだけの言葉ではなくて、いまでは世界中いろいろなところで使われている言葉だからです。日本のように1億何千万人が日本語だけで暮らしているところの方がむしろ特殊です。

**直山** 「いろいろな人と友だちに  
なろう」「自分のことをわかってもらいたい」「相手のことをわかったらいい」という思いがあったら、言葉は身につけていくものなのです。

**梶田** 肌から染みていくようなところがあるから、特に小学校のうちには、「活動を通して」といわれているわけですね。

**直山** いままでの教科は、どちらかという先生と子どもが対面しているイメージがありますが、「外国語活動は横並びよ。一緒に同じ方向を向いて、時と場合を共有していくものや」と申し上げています。先生も子どもからいっぱい学ぶし、子どもは子ども同士でも学ぶ。そういう時間です。だから学級経営が大事なのです。

**梶田** 学級の中には、こういうグローバルな時代ですから英語ができる子もいるでしょう。濃淡はあ

りますが、英語を使っていろいろな活動をしていけば、全然わからない子でもできるようになります。

**直山** 日本語で「リンゴ好きですか」「犬好きですか」というのは、5、6年生では聞き合いのしませんが、ところが英語だったら「Yes, I do.」「No, I don't.」と答えてもらいます。「Do you like apples?」と聞いて、友だちに「Yes, I do.」

すると、「えっ、ほんとに同じもの、好きやったんや。いつもあまりしゃべらへん友だちやけど、へえ、ほんと似てるな」ということをあらためて外国語活動をおして、友だちのことがわかったという感想もすごく出てくるのです。

**\* 話したいと思う気持ちがある言葉の力をつける \***

**梶田** わたしの中学3年生の孫が、1年半ぐらい前に「ニュージールランドの学校を見に行きたい」と言い出しました。それで3週間、ひとりで行ってきました。

ていく、ということですね。

**直山** その視点が大切です。同じ子どもが、小学校、中学校、高校、6・3・3と12年間学ぶので、小・中・高の連携は大人のため、先生のためではありません。子どものためでないといけません。

例えば、外国語活動を5、6年生で経験してきて、中学校で英語の授業を受けたときに「小学校でやってきたこと、役に立っているなあ」と思えるかどうかです。だから中学校の英語の先生は、小学校の外国語活動を踏まえて授業をしてほしいのです。

**梶田** そうなんです。中学校、高校の英語担当の先生方も、小学校の外国語活動の中身をよく知ってほしいですね。

**直山** それなのに「外国語活動、そんなんやって、どうなるの」という声が聞こえることがあります。それは違いますね。

**梶田** 小学校の先生方に手渡された学習指導要領の冊子には、幼稚園、中学校の内容も紹介されています。それは、小学校の先生方に、幼稚園のことも、中学校のことも知ってほしいというメッ



授業で数学はわかったようですが、ほかの教科はそんなにわからなかったようです。しかし、勉強はわからなくても、彼はサッカーが得意。サッカーを通じて友だちができて、仲良く過ごしてきました。そういう中で、少しずつ英語が耳に残ったのでしよう。帰ってきたら、片言ですが、英語がとても上手になっていました。

**直山** 英語の力は3週間ではなかなかつきません。でも、友だちになるために、サッカーと一緒にするために話してみたいという動機。やりたい、続けたいという気持ちをしつかり身につけてこれたのですね。

**梶田** 前向きでさえあれば言葉は自然に身につくものだと痛感

しました。

**直山** これこそが、コミュニケーション能力の素地ですね。コミュニケーション能力の素地はもともと「人と言葉でかかわってみたいな」「人と言葉でかかわるっておもしろいな、楽しいな」ということです。

この気持ちがいまの子どもたちには希薄です。人との直接的なかわり、やりとりが苦手だなと、とても感じます。

**梶田** 携帯電話とゲームとテレビで、みんな個別の世界へ入り込んでしまっているからですね。

**直山** よく「言葉の力をつけるのなら、国語の教科でやるべきでは」といわれます。外国語活動が

セージがこめられています。

各教科の解説書も、今回は文部科学省で研修していた各地の指導主事の先生方にも加わってもらってつくりました。前回までは調査官の先生を中心につくっていましたが、小・中・高の解説のニアンズ、トーンがそろっていませんでした。今回は、現場に近い方々が点検して、小・中高が全部つながるように手が入られています。

だから、今回の解説書は、わかりやすく、筋道がきれいに整ったものになったのです。

**直山** そうですね。外国語では、小学校はコミュニケーション能力の素地、中学校はコミュニケーション

能力の基礎、高校はコミュニケーション能力そのものと、「コミュニケーション能力」でつながっています。

**梶田** 今回の改訂で、中学校の英語の時間数が増えていますね。

**直山** そうです。24年度から週に1時間増えます。中1、中2、中3、各学年それぞれ140時間ですから、英語が中学校3年間でいけば授業数が多い教科になります。

**梶田** 高校の英語の特徴はどうなりますか。

**\* 小・中・高の外国語教育の系統性 \***

言葉の力を日本語だけで鍛えるより、英語やフランス語など、外国語と一緒に鍛えたらより効果的だと思います。

「このペンは長いか短いか」と聞かれても、長いか短いかは、何かと比べないとわかりません。あることがわかるためには何かと比べることが大事。だから、言葉の力をつけるために比べるもの、外国語の力を借りるのです。

例えば一本のペンがあります。「このペンは長いか短いか」と聞かれても、長いか短いかは、何かと比べないとわかりません。あることがわかるためには何かと比べることが大事。だから、言葉の力をつけるために比べるもの、外国語の力を借りるのです。

**梶田** 確かに発達段階の問題やカリキュラムの体系的の問題などがある。英語でも、小学校、中学校、高校でそれぞれ念頭に置かないといけないことはありますが、要は、同じ子どもが身につけ



**直山** 英語の高校での目玉は、教科編成をしたこともありすが、授業を英語であることを基本にしていることです。

小・中・高の連携の課題は、中学校の英語です。「よく小学校が問題やといわれますが、実は中学校英語がいちばんの課題です。コミュニケーション能力の素地をつけた子どもが入ってきて、出口で、「英語で授業」に耐えうる子どもを高校へ送り出さなければなりません。入口と出口ができています。さて、中学校の英語の先生、どうします？」と申し上げています。

**梶田** まさにそうです。それから高校の先生は授業を英語でしないといけないということで、小学校の外国語活動と同様に恐れられている向きがあります。

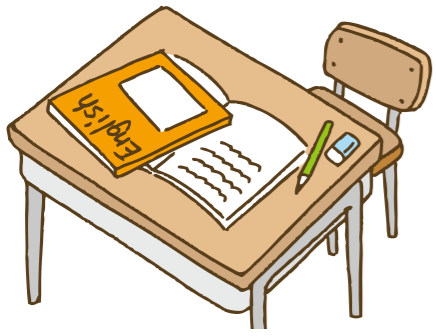
でも、それは特別なことでもなんでもない。子どもの側から英語で通じさせようという気持ちがある育つてくれば、高校の先生もやさしい英語で、受け止めてあげればよいのです。

子どもは小・中・高とつながって大きくなりますから、そんなに心配しなくていいと思います。

です。言葉の背後にある文化的に豊かな蓄積の中に、人間の喜怒哀楽がすべてこもっているのです。「なるほど、こういう言い方なら相手の気持ちを傷つけなくて済むね」「こういう言い方なら相手の気持ちが和むね」というところまでわかってくるとおもしろいでしょう。

**直山** そうすると人との関係もうまくつくれるようになりま。だから、言葉の力はすごく大事です。人間関係をうまくつくるためだけではありません。

人とやりとりする中で「わたしって、こんなええところあるんや」「ここは悪いから直さなあかんのやな」と、自分の存在を確信していくのです。自分に対する自信は



**\* 中学校の英語が要になる \***

**直山** 小学校では、担任だけでなく、ALTが入ったり、外国語が堪能な地域の方がいたりして、わりと担任も英語でやり取りしている場合が多いといえます。ところが中学校へ行ったらとたん、日本語ばかりになる。これはどうなのかと思います。

**梶田** 確かに、今回の小学校の外国語活動から中学校、高校の英語教育で、キーになるのは中学校ですね。

**直山** わたしもそう思います。中学校の先生は、外国語活動を経験してきた子どもたちを迎えるわけです。入門期のところを特に注意してほしいと思います。

例えば、「小学校でやってきた英語は発音が正しくない」「文法も間違ってる」と言うのではなく、中学校の先生はプロだから、それを受け止めてやってほしい。子どもは習ってきたことを否定されたら、「ほくらが小学校でやってきたこと何やったんや」「間違ってたの？」となって、子どもに

そこから生まれると思います。昔の達磨大師みたいに、ひとりで坐禅を組んで悟りが開けるものではないのです。

**梶田** 達磨大師だって、壁に向かって何年か座っていただけではないのです。やはり対話は不可欠です。

達磨大師も、あれだけの素晴らしい弟子を輩出したのには、かなり濃密な対話があったからでしょう。対話のツールとして言葉があることを、小学校のときから英語をやる中であらためて認識できると思います。

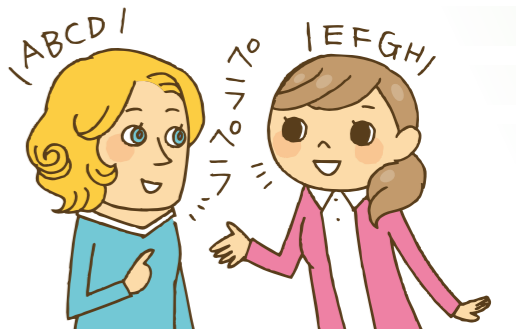
**\* 外国語活動で教育が変わる \***

**直山** この外国語活動で、ものすごく言葉を意識するようになります。いつも当たり前になっていたことが、相手が異言語を話すこと

によって、「言葉ってこうなんや」ということを子どもが認識します。

**梶田** これは、小学校教育における大革命ですね。

**直山** わたしも同感です。小学



とって小中連携になりません。

**梶田** 小学校でやったことを肯定的にとらえて、そのうえに何を築いていくかという発想を中学校ではしてほしいですね。

**直山** 例えば、小学校でp, q, r, s, t, u, v, w, x, y, zやa, b, c, d, eという単語が出ていても、中学校では新しく出てきたものとして扱う形になります。小学校は英語に触れる体験をいっぱいするだけなのです。

**梶田** 言葉をマスターしていくというのは、文法的に少々つじつまが合わないところがあっても、まず伝え合うことです。それをよりきれいにしていくために文法もあるのです。

よりマシンになればよいのです。

校の教育を変える勢いがあると思います。

わたしたち教師は、どうやって教えるかを一生懸命研究します。でもカリキュラムづくりはやっていません。学習指導要領があって、それを具現化した教科書にそって教えてきました。だから教師は、「何でこれをここで教えるんやろ」という学習内容の選択と配列についてはあまり考えていません。ところが外国語活動に関しては選択と配列を考えないといけません。そこにこそ教育の原点があります。

教師が「なんで、ここでこれを勉強せなあかんのやろ」ということをわかってなかったら、実はハウツーなんて出てこない。だから小学校の教育に風穴を開けるぐら

いの勢いが、外国語活動にはあると思います。

**梶田** そのとおりです。しかも、小学校英語は、明治以来の教育課程には、登場していません。

**直山** 英語は、おニューなのです。だから、みんなが頭を切り替えられやすいのです。

外国語活動の研究会に行つて

でも、そのためには先生がよほど勉強しないとけません。同じことを言うにしても、いろいろな言い方があるわけです。

**\* 「英語の世界」に目を向けて \***

**直山** 中学校の先生は、英語が開ける、話せるだけでなく、英語そのものをよく知っていないといけないわけです。これまでは、英語の知識があまりにもおざなりになっていました。

**梶田** これから外国語活動を担当する先生は、この機会に英語文化、英語で培われてきた歴史的な蓄積に関心をもってもらいたい。おもしろいと思われることがたくさんあります。自分なりに英語の世界に目を向けてほしいのです。

**直山** 先生方の視野も広がりますね。

**梶田** 人間としての知的豊かさ

ができてくると思います。こういう言い方が正しい、文法的にこうだというだけでは、不足

みると元気があります。なぜかというところの教科のように歴史がない。外国語活動は先輩もいなくて、みんながフロンティアだから、いろんな意見を言う。だからすごく元気があるのです。

**梶田** 外国語活動が小学校のこれからの教育を変える力になるといいですね。

**\* 評価規準をつくる意味 \***

**梶田** ところで外国語活動の「評価」について、少し触れていただけです。

**直山** 文科省が評価の観点を三つ例示しました。「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」「外国語への慣れ親しみ」「言語や文化に関する気付き」\*です。

小中連携を踏まえ、各学校ではなく、設置者において設定していただくこととなります。だから文科省が出したのは例なのです。

**梶田** 30年前から、観点別学習状況評価の考え方を指導要録に導入してきました。

\*小学校外国語活動 観点と趣旨  
「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」… コミュニケーションに関心をもち、積極的にコミュニケーションを図ろうとする。  
「外国語への慣れ親しみ」… 活動で用いている外国語を聞いたり話したりしながら、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しんでいる。  
「言語や文化に関する気付き」… 外国語を用いた体験的なコミュニケーション活動を通して、言葉の面白さや豊かさ、多様なものの見方や考え方があることなどに気付いている。

## 改訂 実践教育評価事典

### 教育評価の基礎・基本がわかる!

教育評価の基礎理論を解き明かし、  
各教科の「授業づくりにどう生かすか」を詳説。  
絶対評価(目標準拠評価)の時代に、  
評価の目を大切にしたい教育実践を目指す教師必携の一冊。

監修・著／梶田 毅一(環太平洋大学学長) 加藤 明(兵庫教育大学教職大学院教授)  
B5判 264ページ 1色刷 定価2,520円(税込)



## 新しい指導計画作成のための 目標分析と具体的評価規準

### 単元の目標と評価規準がわかる!

新しい評価の観点に対応!  
「関心・意欲・態度」「思考・判断・表現」「技能」「知識・理解」

監修：梶田 毅一(環太平洋大学学長)  
A4判 272ページ 2色刷  
定価1,800円(税込)

付録CD-ROM  
「評価規準シート」  
書き換えに役立つ!!



## 授業づくりシリーズ 新○○科の考え方と授業展開

小学校

全学年・全領域(全単元)の指導計画例

### 授業改善の具体的な方法がわかる!



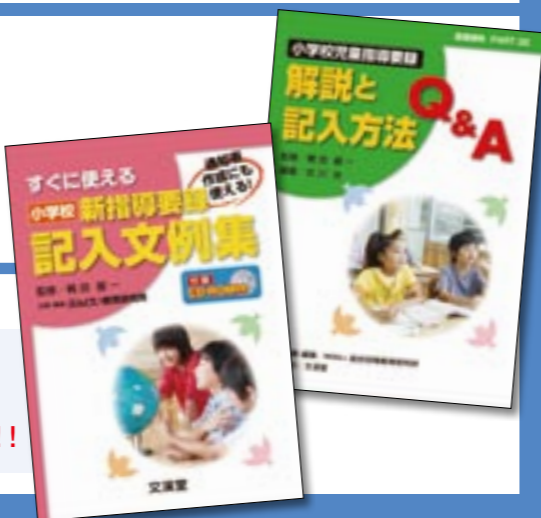
国語 編著／小森 茂 定価 2,310円  
社会 編著／北 俊夫 定価 2,100円  
算数 編著／清水静海 定価 2,310円  
理科 編著／角屋重樹 定価 2,310円  
全 B5判 (税込)

### 指導資料 PART32

## 小学校児童指導要録 解説と記入方法Q&A

### 指導要録作成の方法がわかる!

監修：梶田 毅一 編著：古川 治  
A4判 128ページ 2色刷 1,200円(税込)



## 小学校新指導要録 記入文例集

教科・観点ごとの具体的文例を多数掲載!

監修：梶田 毅一 企画・編集：ぶんけい教育研究所  
B5判 128ページ 2色刷 1,200円(税込)

付録CD-ROM  
「掲載文例を収録」  
文例を編集できる!!

**直山** 外国語においても、目標に準拠した観点別学習評価となりますが、それを効果的に行うために、単元や各時間の目標に照らして評価規準を設定することが考えられます。その意味は三つあります。

一つ目は、先生が「ああ、この単元ではこういう子どもの姿を目指したらええんやな」ということが明確になります。この授業の中で目指す子どもの姿がはっきりすると指導法が見えてきます。その結果から、指導法がどうだったかという振り返りもできます。

二つ目は、どうやってこういう評価ができたのか、何を根拠に教師は子どもを見ていたのかという指標になります。子どもに対しても、保護者に対しても説明する根拠になり、説明責任を果たすことにもなります。

三つ目は、子どもに、「この授業でこんなことを目指すのよ」「これをめあてにがんばろうな」と提示してやることができます。子どもはどこを向いて走ったらよいかがよくわかります。

こういう意味で評価規準をつ

けると効果的なのです。

**梶田** 評価がどうも子どもの選別、差別の道具ととらえられがちです。評価は教育の一環です。評価は教育の中に埋め込まれた一構成要素なのです。だからもう一度、この機会に評価の根本を見つめ直さないといいません。

**\* 外国語活動で育ててほしい子ども像 \***

**梶田** 最後に、直山先生は、外国語活動で子どもたちはどのように育てほしいとお考えでしょうか。

**直山** 外国語活動だけでなく、全教科を通じてのものすごく遠い先の目標になります。「平和」ということだと思えます。

戦争だけでなく、いただいた命を傷つけることはいばんやたらいかんこと。その命を一生懸命生きてへんこともあかんことです。

いただいた命を一生懸命生きるには、自分に自信が必要です。初めから自信のある子なんていない。ほめてもらって、「自分つて

いのや」という思いが育ってくる。自信はみんながつけてくれるものなのです。

自分に自信がある子どもは、主体的に生きていけるのです。本当に自分の命を一生懸命生きる子は、人の命も大事にできるのです。

**梶田** 旧約聖書にバベルの塔のことが書いてあります。天に届く塔をつくらうとしたわけですが、そのおごりたかぶりを懲らしめるために、神様は人々の言葉を通じなくしました。その結果、争いが起こって塔の建設は途中で終わりました。

言葉は、お互いがお互いの気持ちを理解するという最低限のツールです。

**直山** 言葉は、互いに理解しあうためにあります。武器として傷つけるためのものではありません。

**梶田** 大事なのは、英語がもはやアメリカやイギリスだけの言葉ではないことです。古代ローマ帝国のラテン語のような、世界各国の共通語なのです。

子どもたちが世界のどこへ行っても、その国の言葉が知らなくても英語で話ができるわけです。

そうすると、バベルの塔も防げることになるわけです。

**直山** 同じ地球に住む同じ仲間なのですから。

**梶田** 共生能力を言葉を通じて育てるということです。英語を通じて気持ちを通じ合えば、国際平和につながります。英語は全地球的な共生能力を育てるために役立つのです。こうした大目標を目指してみんなががんばりましょう。

梶田直山両先生には、示唆に富んだお話をいただき、ありがとうございました。(編集部)



梶田 毅一先生の教育コラム開設!

ぶんけい 教育コラム

検索